

2021年度 大学院奨励研究員研究報告書

2022年 3月28日

関西学院大学学長 殿

奨励研究員

氏 名	赤田ちづる	印
-----	-------	---

指導教員

所属・職名	人間福祉学部・教授	
氏 名	坂口 幸弘	印

以下のとおり、報告いたします。

研究課題	犯罪被害によるきょうだいの死別に関する研究
採用期間	2021年 4月 1日 ～ 2022年 3月 31日

研究科委員長・研究科長 印	事務局印

提出先： 所属研究科事務

※所属研究科→研究推進社会連携機構（大学院）

研究発表状況（奨励研究員採用期間内に発表したものおよび、近く発表予定のもの）

（１）学会誌等への発表（著者、発表論文名、学会誌名、巻号、発表年月、掲載頁等）

雑誌論文	著者名	坂口幸弘・赤田ちづる	論文題目	コロナ禍における死別 -新たな遺族支援の展開を探る		
	雑誌名	人間福祉学研究		巻号	発行年月	掲載頁
				14	2021年12月	57-73

雑誌論文	著者名	赤田ちづる・坂口幸弘	論文題目	犯罪被害等で大切な人を突然に亡くした遺族が「死者の生きた証」を伝承することの効果		
	雑誌名	グリーフ&ビリーブメント研究		巻号	発行年月	掲載頁
				2	2021年12月	55-64

雑誌論文	著者名	赤田ちづる・坂口幸弘	論文題目	犯罪によるきょうだいとの死別 —親子関係ストレスと心理的反応に関する検討—		
	書名	グリーフ&ビリーブメント研究		巻号	発行年月	
				3	2022年1月受理済 2022年12月刊行予定	

※論文題目：共著の場合の担当部分のタイトル

（２）学会発表（口頭・ポスター：学会名、開催地、発表論文名、発表年月日等）

学会名		開催地	
題目		発表年月日	

学会名		開催地	
題目		発表年月日	

学会名		開催地	
題目		発表年月日	

研究経過状況（3000字程度）

2022年3月末に「犯罪被害によるきょうだいとの死別に関する研究」と題した博士論文を提出した。公開発表会及び口頭試問は4月以降に実施予定である。
博士論文の構成は以下の通りである。

序章

- 第1章 遺されたきょうだいの悲嘆の背景と理論的研究
- 第2章 きょうだいとの死別に関する研究の動向
- 第3章 子どもの死が遺されたきょうだいに及ぼす影響の探索
- 第4章 遺されたきょうだいに親が抱く感情・認識と親子関係の変化
- 第5章 子どもの死が遺されたきょうだいと親の関係に及ぼす影響の探索
- 第6章 きょうだいの死に伴う親子関係ストレスと心理的反応に関する検討
- 第7章 親子間の認識の差が遺されたきょうだいへ及ぼす影響
- 第8章 総合考察と今後の課題

以下、博士論文の要約である。

本論文では、犯罪被害によってきょうだいと死別した遺されたきょうだいの体験の特徴を明らかにし、悲嘆回復プロセスへの影響要因を探索することを目的とした。

第1章では、遺されたきょうだいの悲嘆の背景と理論的研究とし、悲嘆、きょうだい、犯罪の3側面から文研研究を行った。悲嘆理論は、歴史的な発展過程に基づいて、段階モデル、位相モデル、課題モデル、グリーンワーク理論、継続する絆モデル、二重過程モデル、意味再構成理論をレビューした。きょうだいの死に関連する概念としては、家族危機論、家族システムで捉える悲嘆、分離不安と愛着理論、情緒的ネグレクトについてレビューした。

第2章では、犯罪被害によってきょうだいと死別したきょうだいの体験の特徴と社会の認識の現状及び支援に関して、国内外での研究の動向を把握し知見を集積することを目的としたシステムティックレビューを行った。国外文献は、「PsycINFO」「MEDLINE」「Social science Full Text」の3つのデータベースを用いて検索を行い、国内文献は「CiNii」「医中誌」を用いて検索を行った。2019年2月4日までに発行された984編の文献（国外949、国内35）から選択基準に沿って評価し、15件（国外12、国内3）の研究を抽出した。レビューの結果から、遺されたきょうだいを対象とした研究は非常に少ないことが明らかになった。遺されたきょうだいのニーズに沿った支援を構築し提供するためには、研究知見の蓄積が急務の課題であることを示した。

第3章では、犯罪によるきょうだいとの死別体験が遺されたきょうだいに及ぼす影響を探索した。犯罪被害により子ども（きょうだい）を亡くした4家族（親7名、きょうだい7名）を対象に、家族全員に対して個別に半構造化面接を実施した。本章では、きょうだいへのインタビューのみを分析対象とした。遺されたきょうだいの体験の特徴として、「きょうだいという存在の喪失」、「居場所の喪失」、「自責の念」、「消えたい」、「怒り」、「周囲への不信感」、「見捨てられ感」、「家族の崩壊」、「いい子ちゃん」、「家族内役割の変化」、「蚊帳の外」、「あきらめ」の12カテゴリーと28のサブカテゴリーを抽出した。遺されたきょうだいは、きょうだいを亡くした対象喪失に留まらず、事件・事故の前日までの家族を崩壊されていたことが明らかになった。

第4章では、犯罪被害による子どもの死に焦点を当て、遺された親子の関係に与えた影響と時系列変化について、遺されたきょうだいと親の双方の視点から探索することを目的とした。対象は、第3章と同じである。遺されたきょうだいに対する親の感情と認識の特徴として、「見えないきょうだい」、「死にたい」、「伝えられない事実」の3カテゴリーと6のサブカテゴリーを抽出し、遺された親子の関係は大きな困難に直面することが示された。さらに、事件直後、3年後、現在の3地点における親子関係に関して振り返ってもらい、親子間に認識の差があることが示された。

第5章では、遺されたきょうだいの親子関係における苦悩、及び、遺されたきょうだいの悲嘆に関する評価尺度作成のための予備調査として、犯罪被害によるきょうだいとの死別体験による親子関係の様態が、遺されたきょうだいの悲嘆に及ぼす影響を探索した。犯罪によって子（きょうだい）を亡くした親子10組（親10名、きょうだい10名）を対象にした。遺されたきょうだいの親子関係における苦悩は、「家族の崩壊」、「見捨てられ感」、「蚊帳の外」、「家庭内役割の変化」の4因子から構成され、遺されたきょうだいの悲嘆は、「居場所の喪失」、「自責の念」、「消えたい」、「怒り」、「周囲への不信感」、「いい子ちゃん」、「あきらめ」の7因子で構成された。きょうだいとの死別後、遺されたきょうだいが認識していた親子の様態や、悲嘆に関する親子間の認識のずれが、遺されたきょう

うだいの精神健康と関連する可能性がうかがわれた。

第6章は、犯罪被害による死別において、「きょうだいの死に伴う親子関係ストレス」 「きょうだいとの死別による心理的反応」の構成概念を明らかにし、親子関係ストレスと心理的反応、及び精神健康との関連を検討することを目的とした。犯罪によってきょうだいを亡くした遺されたきょうだい148名を対象とした。きょうだいの死に伴う親子関係ストレスは「見捨てられ感」「関係性の混乱」「役割負担の増大」の3因子、きょうだいとの死別による心理的反応は「不信感」「孤立感」「自己存在の否定」「自責の念」「いい子傾性」の5因子から構成された。「見捨てられ感」は、全ての心理的反応、及び精神健康への関連が認められた。

第7章では、犯罪被害による死別において、死別体験後の親ときょうだいの精神的健康に着目し、親の精神的健康及び親子関係の様態が、遺されたきょうだいの精神的健康に及ぼす影響について双方の認識の差異に着目し、探索した。対象としたのは犯罪によって子（きょうだい）を亡くした親子51組（親51名、きょうだい51名）であった。きょうだいの死に伴う親子関係ストレス、及び心理的反応における親子の得点は、すべての項目において、きょうだいの得点が親の得点に比べ、有意に高く、きょうだいの抱える親子関係ストレスや心理的反応の辛さを、親はきょうだいの認識よりも低く見積もっている可能性が示された。

第8章では、遺されたきょうだいの精神的健康、遺されたきょうだいの体験の特徴、悲嘆回復プロセスへの影響要因、見過ごされてきた遺されたきょうだいのニーズにおいて、それぞれ考察し、今後のきょうだい支援への提言を行った。

最後に、大学院奨励研究員として 1年間ご支援いただき感謝申し上げます。